

〔事例報告〕

青年海外協力隊体育隊員候補生の「リフレクション」の実態に関する事例研究 —技術補完研修における模擬授業に着目して—

川 口 諒*
明 石 智**
齊 藤 一彦***
白 旗 和也****

A Case Study on Reflection of the Candidate of
Japan Overseas Cooperation Volunteers in the Field of Physical Education
: Focus on Trial Lesson in “Technical Training”

Ryo KAWAGUCHI

(Graduate School of Education, Hiroshima University)

Tomo AKASHI

(Himeji City Aboshinishi Elementary School)

Kazuhiko SAITO

(Graduate School of Education, Hiroshima University)

Kazuya SHIRAHATA

(Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University)

Abstract

The purpose of this study was to clarify reflection of the candidate of Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) in the Field of Physical Education. Furthermore, it was aimed to obtain suggestions for improving the quality of trial lessons in “Technical Training”. We categorized the description on reflection sheet of eleven candidate inductively. As a result, it became clear that the candidate reflection by the following five perspectives: “Teaching skill”, “Lesson plan”, “Management”, “Device of teaching material and instructional equipment” and “Content of learning and method of learning”. Especially, viewpoint of reflection of the candidates were focused on “Teaching skill”. Then, the following two points were suggested as a viewpoint of improvement in quality of trial lesson at “Technical Training”. First, it is easy to acquire the topics as a viewpoint of candidate by the content that the lecturer wants to let the candidates learn becomes the central topic at case conference. For the reason, it was suggested that if the lecture could purposefully present the content that the lecture wanted candidate to learn as a central issue at case conference, it would be able to efficiently promote the growth of candidate. Second, it is necessary for the candidate of JOCV to unlearn and reconsider how physical education lesson should be practiced in their countries of assignment. Therefore, it was suggested that lecturer who conduct “Technical Training” is required instruct and advice based on the premise that JOCV conduct physical education lesson in developing countries.

* 広島大学大学院教育学研究科, ** 姫路市立網干西小学校, *** 広島大学大学院教育学研究科,

**** 日本体育大学体育学部

1. はじめに

日本政府は2014年1月より、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を見据え、スポーツを通じた国際貢献事業であるスポーツ・フォー・トゥモロー (Sport for Tomorrow) を実施している。そして、スポーツ・フォー・トゥモローとして推進されているわが国のスポーツを通じた国際協力の中で、最も実績があるのが青年海外協力隊事業である (齊藤, 2015)。2017年7月31日現在で、派遣中の隊員の約半数を占める「人的資源」部門で「体育」が4番目に派遣数が多い職種となっている (国際協力機構, online1)。この「体育」という職種は、多くの隊員が学校現場において一教員として体育の授業を担当したり、現地の同僚たちに体育授業の教授法を紹介したりする職種である (国際協力機構, online2)。

ところで、青年海外協力隊員として海外へ派遣されるためには、1次選考及び2次選考を通過し派遣前訓練を受講しなければならない。しかし、2次選考において、専門分野の技術・知識水準は合格レベルに達しているものの、受入国からの要請に的確に応えるための実践的な技術や教授法等を事前に習得する必要があると判断された場合には、技術補完研修を受講しなければならない (国際協力機構, online3)。対象となった隊員候補生 (以下、候補生と略記) は、この技術補完研修を終了することが派遣前訓練を受講できる条件となっている。2017年度秋募集における「体育」の要請情報を参照すると、その応募資格にある程度の実務経験を要するものが多くある一方で、中学校及び高等学校の保健体育の教員免許を取得しているだけでも応募資格のある要請も多くある (国際協力機構, online4)。このことから考えれば、「体育」に関しては、保健体育の教員免許を持っているものの、実務経験のない (もしくは少ない) 候補生が技術補完研修を受講しているものと推察される。そして、この「体育」の技術補完研修においては、国内外の体育科教育に関する理論的な内容の講義とともに、実践的な指導力を身につけ

させる目的として研修内容に模擬授業が組み込まれている。

他方、白石 (2015) は、技術補完研修に関して4名の隊員へのインタビュー調査を行っており、「体育」の技術補完研修の期間が3日間と他の職種に比べて短期間であることから、候補生の質向上のために技術補完研修の期間を延長することを提案している。しかし、技術補完研修の期間を延長して「量的」な改善を行っても、それによって技術補完研修の「質的」な改善につながるのかは別の問題であると考えられる。そのため、まずは現在行われている研修の内容を改善することが優先事項であろう。そもそも、技術補完研修は、「受入国からの要請内容に的確に対応するため、その協力活動の分野において必要とされる実務的な技術・技能などの向上を図ることを目的 (傍点筆者)」 (国際協力機構, online5) として行われている。この「技術・技能」を向上させるためには、実践的な活動を伴った研修内容が求められるであろう。「体育」の技術補完研修においては模擬授業が取り入れられており、この模擬授業が実践的な活動を伴った研修に当たると考えられる。そのため、模擬授業の質を改善することで、技術補完研修に求められる「技術・技能」の向上につながるのではないだろうか。

模擬授業は、教師の教授内容ではなく、教師の教授技術の向上を図るために考慮された方法である (笹本, 1978)。実際に模擬授業がわが国に紹介され、教授技術の向上に焦点を当てた実践報告がなされている (藤田, 2015)。一方で、近年では模擬授業において教授技術だけにとどまらず、「リフレクション」という視点から検討がなされている。「リフレクション」とは、「反省的実践家 (reflective practitioner)」という教師の専門職のパラダイムシフトを提案した、ショーン (2007) が用いた概念である。また、日本教育大学協会 (2004) によって、今後の教員に求められる「実践的指導力」について、「大学で教員を養成する」ということの原点に立ち返り、「教育実践を科学的・研究的に省察 (reflection) する力」を中軸

に据えることが提案された。これを契機に、教員養成課程においてカリキュラムの中に「リフレクション」の概念を組み込むようになっていった。そしてこのような背景から、教員養成課程の学生の「リフレクション」を育成する手法として模擬授業が用いられるようになった (e.g., 木原ら, 2007; 岩田ら, 2010)。「リフレクション」は自らの思考の枠組みを問い直す思考であり (坂本, 2007), そのためには基盤となる経験や知識が必要となってくる。そのように考えれば、経験を得ることのできる模擬授業だけでなく、知識を得るための理論的な内容の講義についても検討する必要があるだろう。しかし、本研究においては、より実践的に「リフレクション」が促されると考えられる模擬授業に限定して研究を進めていくこととする。

以上より、「体育」の技術補完研修における模擬授業の質を向上していくために「リフレクション」の視点から検討していく必要があるだろう。そして、模擬授業において候補生に「リフレクション」を促すための方略を設定することが必要であると考えられる。

岩田ら (2010) は、教員養成課程の学生が行った模擬授業の振り返りとして自由記述させたシートの記述をもとに、「リフレクションシート」を開発した。そして、その「リフレクションシート」を用いることで学生の「リフレクション」の視点が拡大することが報告されている (岩田ら, 2010)。他方で、模擬授業を実施する際には生徒役や観察者という役割が生まれてくる。シヨーン (2007) は、あくまでも「リフレクション」の主体を実践者自身としているため、このような生徒役や観察者は「リフレクション」の主体とはなりえないことになる。しかし、久保・木原 (2013) は、「リフレクション」の対象を自己の実践のみならず、他者の実践や理論へも対象を拡大することを提案している。そうすることで、生徒役や観察者も「リフレクション」の主体となりえると述べている。ただし、他者の実践や理論を対象として「リフレクション」を行う場合は、単なる感想や批評

だけでなく代案を提示し、自身の実践に結びつけるような思考ではならないと指摘している。そのため、本研究においては、岩田ら (2010) の「リフレクションシート」を参考にしながら、久保・木原 (2013) の指摘をもとに「改善策」の提示までを含めた記述を促すためのリフレクションシートを用いることとする。

そこで本研究では、技術補完研修での模擬授業において候補生の「リフレクション」を促すための方略としてリフレクションシートを用いることとする。その際に、リフレクションシートに「改善策」の欄を設けることで、代案を提示しながら「リフレクション」するように促す方略を設定した。そして、技術補完研修での模擬授業における候補生の「リフレクション」の実態を明らかにすることを目的とする。さらに、その知見をもとに技術補完研修における模擬授業の質の向上のための示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象

調査対象は、平成 28 年 9 月 2 日から 9 月 4 日の 3 日間で行われた「体育」の技術補完研修に参加した 13 名の候補生である。事前に技術補完研修の責任者に調査の許可を得て、対象となった候補生にも調査への参加の有無は自由であり、その有無によって選考には一切の影響がない旨を伝え、全員から調査協力の同意を得た。

今回の技術補完研修では、日本の体育科教育や世界の体育・スポーツ事情、世界の体育科教育、最終日の模擬授業に向けた指導案作成についての講義などが行われた。そして、最終日には 11 名の候補生が 4 グループに分かれ、各グループが 1 回ずつ授業者として、40 分間の模擬授業を行った。対象とした技術補完研修の日程を表 1 に示している。また、表 2 は模擬授業のグループ及び模擬授業の目標と内容を示している。そして、模擬授業終了後には、毎回 15 分程度の協議会が行われた。なお、調査対象である 13 名の候補生のうち、

候補生 L と候補生 M は模擬授業の講義ではなく、イベント開催の講義に出席していたため、生徒役として4時間目の模擬授業と4回目の協議会のみに参加した。そのため、最終的に調査対象としたのは、候補生 L と候補生 M を除く、模擬授業を行った11名の候補生とした。

また、模擬授業を担当したのは講師 X と講師 Y の2名であった。この2名の講師は体育科教育を専門としており、教員養成に従事している。なお、主に日本における体育科教育について研究を行っているため、講師自身が青年海外協力隊として国際協力に参加した経験はない。

2.2. 調査内容と調査方法

調査内容は、候補生が模擬授業を実施した際に、それらを候補生が「リフレクション」した内容である。それらを調査するために、模擬授業を行った11名の候補生に協議会も含めた全ての模擬授業の日程が終了した後に、10分程度模擬授業の反省をリフレクションシートに記入させた。本研究で用いたリフレクションシートは図1のとおりである。このリフレクションシートは、岩田ら(2010)が開発した「リフレクションシート」の様式を参考にしながら、「リフレクション」の視点となる項目を改変した。加えて、目的でも述べたように「改善策」まで提示させるために「リフ

〈表1 平成28年度3次隊・4次隊体育隊員候補生の技術補完研修内容〉

日付	タイトル	内 容
9/2	スポーツ分野（体育）派遣の意義	体育の派遣の必要性、 創意工夫・活動展開・安全指導。
	日本の体育科教育	最近の教育の動向、日本の体育科教育システム。
	体育科教育の教材構成・評価（1）	体育科教育の教材構成について、
	体育科教育の教材構成・評価（2）	授業評価のポイント。
	体力調査	体力測定実施についての要点、統計処理の仕方。
9/3	世界の体育科教育	海外の体育科教育、 スポーツ開発教育の現状と動向について。
	「派遣国の現状と活動報告」	派遣国の現状、活動成果、問題点、今後の課題。
	学習指導案作成	学習指導案作成のポイント、 イベント開催についての要点。
9/4	模擬授業・イベント開催	模擬授業及び検討会、イベント開催企画・運営。
	本研修のまとめ	本研修のまとめと振り返り。

〈表2 模擬授業の内容と目標〉

時間	対象 学年	教材 (授業者)	本時の目標
1	中1	ダブルセットバレー (A, B, C)	チーム内で互いに協力し、的確なポジションを把握できる
2	小5	体づくり運動 (D, E, F)	どのような運動を行うと体力が高まるのか分かっている
3	中3	バスケットボール (G, H, I)	パスを出した後に次のパスを受ける動きをできるようにする
4	中1	マット運動 (J, K)	マット運動に積極的に取り組もうとしている

	事実と評価	原因（要因）	改善策
授業展開 (スムーズな流れ, 時間配分, 移動の仕方など)			
教師行動 (観察の場所, 言葉かけ, 示範, 声の大きさなど)			
教材 (ゲームの工夫, 用具の工夫, 学習内容の明確化など)			
場の工夫 (用具の配置, 練習の場所, 安全確保など)			

〈図1 本研究で用いたリフレクションシートの様式〉

レクション」の段階を区別した。また、候補生が記入したリフレクションシートの記述を解釈するための補助資料として、協議会における参加者の発言内容をICレコーダーで記録した。なお、協議会は、授業者の候補生がそれぞれ反省を述べた後に、2名程度の生徒役の候補生がコメントをして、最後に、体育科教育を専門とする講師のX氏とY氏が助言を行うという流れで展開された。

2.3. 分析の手続き

11名の候補生が全ての模擬授業が終了した後に記入したリフレクションシート11枚の記述を分析対象とした。候補生がどのような視点で「リフレクション」を行っているのかを明らかにするために、リフレクションシートの記述を帰納的に分類した。その際に、リフレクションシートの「改善策」の欄の記述に限定することとした。なぜならば、「リフレクション」は、教師が問題に直面した時にそれまでの経験や自身の実践的知識を駆使して試行錯誤する問題解決的な思考（木原, 2008）であるため、リフレクションシートの「改善策」の記述において、その「問題解決的な思考」が端的に表れていると考えられるためである。

帰納的に分類する際には、対象とした記述にその内容を表す項目名を付け、小項目とした。さらに、それぞれの小項目の内容が類似しているもの

を集め、それらの内容を表す項目名を付け、大項目とした。なお、リフレクションシートの記述の分析は結果の内的妥当性を高めるために、筆頭執筆者と体育科教育学を専門とする大学教員（教員養成に9年間従事）と協議しながら行った。

3. 結果

分析対象とした記述は合計で44個であり、それらを帰納的に分類した結果、「教授行為（14）」、「授業計画（10）」、「マネジメント（8）」、「教材・教具の工夫（7）」、「学習内容・方法（5）」の5つの大項目が最終的に生成された（表3）。「教授行為」は、「フィードバック（8）」、「説明（2）」、「観察（2）」、「臨機応変な対応（2）」の4つを下位項目として含んでいる。「授業計画」は、「生徒の実態の考慮（7）」、「予行練習（1）」、「教材研究（1）」、「準備（1）」の4つを下位項目として含んでいる。「マネジメント」は、「安全管理（5）」、「時間配分（3）」の2つを下位項目として含んでいる。「教材・教具の工夫」は、「教具の工夫（2）」、「場の工夫（2）」、「学習カードの活用（1）」、「教材の工夫（1）」、「ボードの活用（1）」の5つを下位項目として含んでいる。そして、「学習内容・方法」は、「学習内容の明確化（2）」、「学習内容の選別（1）」、「学習内容の簡略化（1）」、「目的に応じた学習方法の工夫（1）」の4つの下位項目を含んでいる。

〈表3 リフレクションシートにおける記述の分類とその具体例〉

大項目 (個数)	小項目 (個数)	具 体 例
教授行為 (14)	フィードバック (8)	ゲームを止めてでも、アドバイスをするときには丁寧に教える。
	説明 (2)	最低限必要な情報はどのようなことなのかを軸に説明を行う。
	臨機応変な対応 (2)	生徒の状況に応じて臨機応変に対応できるようにする。
	観察 (2)	生徒をよく観察し、指導する。
授業計画 (10)	生徒の実態の考慮 (7)	体づくり運動の教材を理解し、生徒の実態に即した授業を行う。
	予行練習 (1)	自分で運動をしてみても見えてくることがあると思うので、一度頭の中でもデモンストレーションを行うことで整理される。
	教材研究 (1)	いろいろな教材研究。ものがなかった時の事を考え、柔軟に対応できるようにする。
	準備 (1)	授業前の準備を早めしておくこと。
マネジメント (8)	安全管理 (5)	安全第一なので、ガムテープで固定したり、手のあいている生徒に押さえさせるなどする。
	時間配分 (3)	グループで話し合う時間を〇時までと伝えてもよかった。
教材・教具の工夫 (7)	教具の工夫 (2)	ビブスではなく、タオルや帽子で工夫できるようにする。
	場の工夫 (2)	ネットを低くしたり、コートを狭くしたりと、できる環境でいろいろなシチュエーションを作る。
	学習カードの活用 (1)	良い動き、訂正すべき動きなど、シートに記録するなど形に残るようにする。
	教材の工夫 (1)	人数などの把握をしてできるだけ全員が参加できる教材にする。
	ボードの活用 (1)	練習時間や子どもたちの目安になるものはボードなどに書き出しておく。
学習内容・方法 (5)	学習内容の明確化 (2)	授業の中で今日伝えたいことは何なのかを理解させたいのかを明確にする。
	学習内容の選別 (1)	学習内容は分かりやすくしたいという気持ちが強く、そのせいで情報量が少なかった。
	学習内容の簡略化 (1)	バスケットボールを今までやったことがない生徒に教える気持ちで、内容をできるだけ分かりやすくすること。簡略化することで工夫につながると思う。
	目的に応じた学習方法の工夫 (1)	トスで終わらず、アタックまで行ける練習方法にする。

4. 考察

4.1. 他者との協働による「リフレクション」の視点の獲得

教員養成課程で行われる模擬授業における学生の「リフレクション」の視点が教師の行動に多く集中することが報告されている (e.g., 木原ら, 2007; 日野・谷本, 2009; 岩田ら, 2010)。本研究においても、「教授行為」や「マネジメント」といった教師の行動に関する項目が全体の半数を占める結果となっている。その中でも、「フィードバック」に関する記述が多く見られた。これは1時間目のバレーボールの模擬授業とその協議会が要因となっていることが推測される。授業者の候補生Cがゲームの途中で一旦ゲームを止めてフィードバックをする場面があった。そして、その後の協議会でその出来事について、候補生Bや候補生Kから候補生Cの「フィードバック」に関する話題が提供された。加えて、講師Yからもその場면을称賛するコメントがなされている。10分という短い協議会の中で、中心的な話題になったことで候補生にとっては印象的な視点となったと考えられる。その証拠に、2時間目の体づくり運動の協議会においても、授業者である候補生Dや候補生Eが自評として「フィードバック」に関する発言をしている。

これらの協議会における発言が「フィードバック」に関する記述が多くなった要因であると考えられる。本研究においては、協議会を含めた模擬授業の全日程が終了してからリフレクションシートを記述している。そのため、模擬授業を通して候補生が印象に残った事柄をリフレクションシートに記述していると考えられる。これは、1時間目の協議会で候補生にとって印象的な話題となり、2時間目の協議会における自評でもその話題が表出したことから、候補生にとって「フィードバック」という視点が印象的であったことが推察される。つまり、講師が候補生に学ばせたい内容を意図的に協議会の中心的な課題として提示することができれば、より効率的に候補生の成長を

促すことができると示唆される。そのためには、講師が「リフレクション」の視点を与えたりするなどの協議会の運営方法の工夫が求められるだろう。

4.2. 開発途上国において実践するという立場からの「リフレクション」の重要性

教員養成課程で行われる大学生同士の模擬授業の限界性が指摘されている (日野・谷本, 2009)。その1つに、対象と想定している児童生徒がリアルなものではないことによる、その対象の実態把握の困難さが挙げられる。本研究において対象としている候補生たちは、実践的な経験が少ないため技術補完研修に参加している。それゆえに、教員養成課程の学生と同様に児童生徒の実態把握に困難さを抱えていることが考えられる。その証拠に、「生徒の実態の考慮」という項目に多くの「リフレクション」の焦点が集中していた。その要因となったのが4時間目の器械運動の模擬授業が関係していると考えられる。この模擬授業においては、1分～2分の長さでマット運動の集団演技の構成を考えて発表するという学習課題が設定されていた。そして、実際に授業者が模擬授業を実践してみると、この学習課題が、実際の中学生には少し難易度の高いものであったとの気づきがあった。その気づきについて、授業者である候補生Jと候補生Kは自評で反省点として述べている。さらに、この点について講師Xも、演技構成の活動の全てを児童生徒に一任するのではなく、児童生徒の実態に合わせて、一定の拍で区切って考えさせるような視点を与えたり、ある程度の規定演技を指定したりという工夫が必要であると指摘している。

これらから、授業者の2名の候補生は、協議会において実際の児童生徒を対象にする場合の視点に立って「リフレクション」していることが窺える。つまり、候補生にとって授業を計画する段階においては、その学習課題が児童生徒にとって適切なのかどうかを判断することが難しい一方で、実際にやってみると自身を基準にして児童生徒に

とってどのような難易度であるかの判断が出来るようになったと考えられる。

しかし、開発途上国において体育・スポーツ活動を行うということを考えれば、より計画段階から対象となる児童生徒の実態というものを考慮していく必要があるだろう。また、開発途上国においては環境面の課題もあり（木村ら、2015）、多くの面で日本の文脈とは異なる環境で実践を行っていかねばならない。そのように考えれば、候補生にとって未知に近い世界に向けた視点というものを持つべきではないだろうか。リフレクションシートの記述を見てみると、開発途上国で実践を行うという前提に立って解決策を思考しているものは以下の2つのみであった。

「ものがなかった時のことを考え、柔軟に対応できるようにする」（候補生C）

「ビブスではなく、タオルや帽子で工夫できるようにする」（候補生H）

長期間行われる派遣前訓練において、それぞれが派遣される国の言語や文化、習慣を前提とした訓練が実施されるものと推測される。しかし、この派遣前訓練は様々な職種の候補生が集まり訓練を受けることとなる。そのため、同じ職種の候補生だけで行われる技術補完研修においても開発途上国での実践を志向した視点に重点を置いてもいいのではないだろうか。先にも述べたように、協議会において他者と協働して協議を行うことによって候補生は新たな「リフレクション」の視点を得ることが期待できる。そのため、指導案を計画する段階から開発途上国における実践を想定するようにしたり、リフレクションシートにそのような記述欄を設けたり、協議会における講師の振り返りのコメントにそのような視点に立った指摘を入れたりなどの工夫をすることが必要と思われる。そのようにすれば、この技術補完研修における模擬授業は、候補生たちが開発途上国で実践を行うために必要な現地の体育施設や子どもの実態

を理解するための支援の役割を果たすと考えられる。

5. おわりに

本研究では、「体育」の技術補完研修における模擬授業を対象として研究を行った。しかし、3日間という短期間での研修であったため、模擬授業の振り返りに多くの時間を確保することができず、それぞれの模擬授業終了後に協議会を設けたものの、リフレクションシートを記入したのは4時間の模擬授業が全て終わった後であった。そのため、実際に何が要因となって候補生が「リフレクション」の視点を得たのかを明確にすることは限界があると考えられる。

また、本研究は対象者も少なく、あくまで1つの技術補完研修を事例として取り上げただけであるため、今回得られた知見を一般化することは困難であると考えられる。今後はより多くの対象者を確保しつつ、候補生の「リフレクション」の実態を広く捉えていく必要があるだろう。

文献

- ドナルド・A・ショーン：柳沢昌一・三輪健二監訳(2007)省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—。鳳書房：東京。
- 藤田育郎（2015）大学における模擬授業の手法とその成果。岡出美則ほか編 新版体育科教育学の現在。創文企画：東京，pp.210-223。
- 日野克博・谷本雄一（2009）大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造。愛媛大学教育学部保健体育紀要，6：41-47。
- 岩田昌太郎・久保研二・嘉数健悟・竹内俊介・二宮亜紀子（2010）教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討—「リフレクション」を促すためのシート開発—。広島大学大学院教育学研究科紀要第二部，59：329-336。
- 木原成一郎（2008）中学・高等学校の保健体育教師に求められる「実践的指導力」をどう育成するのか—テーマ設定の趣旨—。体育科教育学研究，24（2）：31-32。

- 木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定 (2007) 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 56: 85 - 91.
- 木村寿一 (2015) 教育とスポーツ I. 齊藤一彦ほか編 スポーツと国際協力—スポーツに秘められた豊かな可能性—. 大修館書店: 東京, pp.92-108.
- 国際協力機構 (online1) 青年海外協力隊派遣実績. <https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/results/jocv.html>, (参照日: 2017年11月8日).
- 国際協力機構 (online2) 「体育」ってどんなシゴト?. https://www.jica.go.jp/volunteer/application/pdf/job_info/physical_training.pdf, (参照日: 2017年11月8日).
- 国際協力機構 (online3) 合格から派遣まで. <https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/training/index.html>, (参照日: 2017年12月10日).
- 国際協力機構 (online4) 要請・職種情報 職種別一覧 (2017年度秋). <http://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/?m=BList>, (参照日: 2017年11月8日).
- 国際協力機構 (online5) 技術補完研修の手引き. https://www.jica.go.jp/volunteer/qualifier/seinen/skill_complement/pdf/tebiki.pdf, (参照日: 2017年11月8日).
- 久保研二・木原成一郎 (2013) 教師教育におけるリフレクション概念の検討: 体育科教育の研究を中心に. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部学習開発関連領域, 62: 89-98.
- 日本教育大学協会 (2004) 教員養成の「モデル・コア・カリキュラム」の検討—「教員養成コア科目群」を基軸にしたカリキュラム作りの提案—. 会報, 88: 253-352.
- 齊藤一彦 (2015) ODAによるスポーツを通じた国際協力. 齊藤一彦ほか編 スポーツと国際協力—スポーツに秘められた豊かな可能性—. 大修館書店: 東京, pp.41-61.
- 坂本篤史 (2007) 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, 55: 584-596.
- 笹本正樹 (1978) マイクロ・ティーチングの理論と効用. 香川大学一般教育研究, 13: 1-14.
- 白石智也 (2015) 青年海外協力隊における体育隊員の技術補完研修の質向上に向けた事例研究—隊員へのインタビュー調査から—. 平成26年度広島大学卒業論文.